

「デサエ」二種の由来

山田昌裕

The Origin of the Two Types “DESAE”

Masahiro Yamada

Abstract

There are two types of “DESAE”. One is particle “DESAE” of connection with the case particle “DE” and the Japanese adverbial particle “SAE” and one is the united particle “DESAE”. In this paper I analyzed that the origin of two particles is different. The origin of the connected particle “DESAE” is “NITESAE”, and “NITESAE” is not the origin of the united particle “DESAE”.

Keywords : The origin of the connected particle “DESAE”, “NITESAE”

キーワード：接続の「デサエ」の由来, 「ニテサエ」

1. はじめに

山田 (2012) において, 「デサエ」には「デ」と「サエ」が単に接続した場合と, 「デ」と「サエ」が融合化 (複合助詞化) した場合の二種があることを指摘し, 融合化とその背景について考察した。

- ① 現在, 日本では外国人を避ける旅館が少なくない。有名観光地でさえ, 多言語での看板やパンフレットの設置, インフォメーションセンターの対応ができてるのは一部だ (「私の視点」外国人観光客 再訪誘う由布院を手本に」2012年05月23日朝日新聞朝刊 p. 15)
- ② 年末にかぎらず, ここはいつ訪れても数多くの人でにぎわっており, 活気ある呼び込みが耳に心地よく響きます。ひっきりなしに通る電車の音でさえ, ここでは商店街の活気をさらに強調する BGM のように聞こえま

す。「東京物語散歩」2012年05月16日朝日新聞朝刊 p. 28)

①の場合、「デサエ」から「サエ」を消去し、「有名観光地で～対応ができて
いるのは」としても日本語表現としては特に問題はない。つまり、場所を示
す格助詞「デ」に「サエ」が下接した表現形式であり、接続した「デサエ」
であると考えられる。しかし、②の場合、「デサエ」から「サエ」を消去
し、「電車の音で～BGMのように聞こえます」とすると日本語表現として
はおかしくなる。「デサエ」の代わりに格助詞を補うとすると「電車の音が
BGMのように聞こえる」であり、「電車の音」はガ格名詞句であることが
わかる。つまり、この場合の「デサエ」は、格助詞「デ」に「サエ」が下接
した単なる助詞の接続形式「デサエ」ではなく、一つの助詞として融合化し
た表現形式であるということである。

このような融合化した「デサエ」の発生過程については、「デ」が動作主
に下接するという性質を持たないうちは、ガ格成分と強い結びつきを持つ
「サエ」は「デ」との交渉を持ちえず、江戸期に入り「デ」が動作主に下接
するようになって初めて「デサエ」の融合化が可能になると結論づけた。一
方、接続の「デサエ」は前代から見られる「ニテサエ」に由来するものであ
ると予測した。

しかし山田(2012)によれば、①のような接続した「デサエ」と②のよう
な融合化した「デサエ」の割合は、江戸期においてすでに同程度存在するこ
とがわかっており、接続の「デサエ」がそもそもあって、その中から融合化
が進んだ可能性は捨て切れていなかった【表1】。

【表1】	江戸期	明治大正期
接続	32 (45. 1%)	35 (28. 9%)
融合	39 (54. 9%)	86 (71. 1%)
合計	71 (100. 0%)	121 (100. 0%)

そこで本稿では、江戸期以前の状況を調査し、江戸期における接続の「デ
サエ」は前代の「ニテサエ」を引き継いだもので、融合化した「デサエ」は
「ニテサエ」と出自を異にするということを明らかにしたい。

2. 鎌倉室町期

ここでは、「デサエ」の前身と思われる「ニテサエ」の用例を取り上げ、それが「ニテ+サエ」という連接として存在するのか、融合化が見られるのかについて検討する。そのために「ニテ」の実態や「デ」の実態を調査する。

2.1 「ニテサエ」

管見によれば江戸期以前に「デサエ」は見られない。そこで「デ」の前身と思われる「ニテ」に「サエ」が下接する例を見ていく¹⁾。以下は鎌倉室町期の資料に見られた「ニテサエ」の全例である²⁾。

- ③ いとゞながれ出んす糸のなのうさといひ、又さしもつみふかうなることにてさへ、とぢめはてんのちのうきせこそなど、たへがたくおほしほれたるを（鎌倉時代物語集成2『いはでしのお拔書本』p. 324）
- ④ 御ふみありて、「此世にてさへとひたまはねば、ましておぼつかなけれ。なき跡をいかでかとはん五月雨に三瀬河の水まさりなば」（鎌倉時代物語集成5『松陰中納言物語』p. 99）
- ⑤ この世にてさへをもきくるしみの海にたゞよひしを、ましてとおもひやらるゝうへに、くはんぜをんの御めぐみの、いとかしこくおほえたてまつれば（鎌倉時代物語集成5『松陰中納言物語』p. 137）
- ⑥ 「よしや、行とまるこそ、やどならめ。住はつべきよの中かは」と、こゝにてさへ、いとはしきかたもよほされ給ふ（鎌倉時代物語集成5『八重葎』p. 359）
- ⑦ この人々、かくは申し候へども、いかがして具し参らせべき、都にてさへ紛れさせ給ふ方なくあらんずるに、思ひながら、さてあるべきことならねば、案じくらすに（室町物語草子集『文正草子』p. 48）
- ⑧ かの僧、「少しも似させ給はず。正しく兄弟にてさへ似たることは少なく候ふに、まして従兄弟などになりぬれば、必ず似させ給ふべきにあらざ」『曾我物語』p. 155）³⁾
- ⑨ 「さばかりすき事このむものどもの、いまゝでしらざりけんよ。われにてさへ、ながきほだしとおぼゆるぞ、はらぎたなき心には有ける（鎌倉時

代物語集成5『八重葎』p. 361)

③～⑧はそれぞれ「サエ」を消去しても表現としては問題ないので、接続の「ニテサエ」であると思われる。⑨の場合は、「われにて、ながきほだしとおほゆるぞ」では表現として違和感が残る。「われ」は「おほゆる」の動作主としてみなすことができるが、「ニテ」には本来動作主を表示する機能はないからである。したがって、「ニテサエ」が融合化している可能性がある。

しかし、古典語においては内省が効かないこと、「ニテサエ」において融合化していると思われる例はこの1例のみであり、資料の成立年代が不明確であるという問題も否めないことなど、直ちに⑨の例を融合化している例と認めるわけにはいかない。そこで次節では、鎌倉室町期において動作主に下接する「ニテ」が存在するのかどうかについて検証する。

2. 2 「ニテ」の実態

鎌倉室町期の資料では約9000例の「ニテ」が見られるが⁴⁾、動作主に下接していると解釈可能な例は⑳, ㉒～㉓の5例のみであった。以下に動作主に近い名詞句に下接する「ニテ」の例とともに示す。

2. 2. 1 「(場所名詞) +ニテ」

⑩ 「かゝる事こそなけれ。六波羅にて尋ねきくべかりし事を、梶原申すに付けて、御坊を是まで呼び下し奉りて、散々に悪口せられ奉りたるに、頼朝こそ返事に及ばず、身の置所なけれ。」(『義経記』p. 272)

⑪ この事、次第に六波羅にてたづね沙汰する程に、三條宰相中将實盛も召しとられぬ。(『増鏡』p. 387)

⑩⑪のような例は散見する。場所名詞がそこに存在する人物を表す表現法であり、この表現法は古くから見られるもので、格助詞「ニ」などにおいても同様の表現が見られる。次の⑫～⑬の場合は、尊敬表現を伴っており、場所名詞がさらに人性を帯びるとされる。とはいうものの、やはり「ニテ」は場所を示しているのであり、動作主に下接しているとは考えられない。

- ⑫ 待よひの小侍従といふ女房も、此御所にぞ候ける。この女房を待よひと申ける事は、或時御所にて「まつよひ、かへるあした、いづれかあはれはまされる」と御尋ありければ（『平家物語』上 p. 339）
- ⑬ 天慶八年正月五日、右大臣家にて饗をおこなはれけるに、はてつかたに、式部卿親王とおとゞと、歸徳曲を唱へられたりけるに（『古今著聞集』 p. 198）
- ⑭ 同三年十一月卅日、院にて舍利講をおこなはれけり（『古今著聞集』 p. 229）
- ⑮ この御門もやがてかの殿にて養ひたてまつらせ給ける（『増鏡』 p. 254）
- ⑯ かくて、この度撰ばれたるをば、新古今といふなり。元久二年三月廿六日、竟宴といふ事、春日殿にて行なはせ給（『増鏡』 p. 257）

2. 2. 2 「(場所名詞以外) +ニテ」

⑰の「ニテ」の上接語である「導師」は、「佛供養しける」という動作性述語に係っており、当該箇所係り受けだけを見ると動作主のように思われる。しかし前文では、「順聖といふ僧」という人物が紹介されており、「僧」が「導師として」という文脈であることがわかる。

- ⑰ 彼三位入道うせられたりける時、大夫阿闍梨順聖といふ僧、年比其邊のものなりければ、箆僧にいれてけり。五七日の導師にて、佛供養しける説法に、「——（中略）——」とうちあげたりける（『古今著聞集』 p. 438）

しかし時代が下ると、前提となる人物が紹介されていない⑱⑲⑳のような例が見られる。⑱は、⑰に比べれば、「ニテ」が「ガ」に通じるころもあるが、「人にて」は「恋心のある」に係っており、「人」に動作性が認められる例というわけではない。⑲の場合は、尊敬表現を伴うので「おん身にて」には動作性が色濃くなるが、「おんふるまひ」という動作性名詞に係っているため、やはり動作主とは認められない。それに対して、⑳の「臣家」は、「タスケタテマツラル」という動作性述語に係っており、「ニテ」は動作主に下接していることと見ることが可能である。ただし、前文脈で「臣家ノイデキテ」とあることから、「ニテ」を様態として、臣家が「臣家として」「ヲタスケタテマツラル」という解釈ができる例でもある。

- ⑱ されば花物言はずとこそ見えたれ、人にてはなを恋ひ心のあるは理ならずや（謡曲集上「雲林院」p. 150）
- ⑲ あらあさましや六条の御息所ほどのおん身にて、後妻打ちのおんふるまひ、いかでさること候ふべき、ただ思しめし止まり候へ（謡曲集上「葵上」p. 127 ）
- ⑳ サテコノ、チ、臣家ノイデキテ世ヲオサムベキ時代ニゾ、ヨクナリイル時マデマタ天照大神アマノコヤネノ春日ノ大明神ニ同侍殿内能爲防護ト御一諾ヲハリニシカバ、臣家ニテ王ヲタスケタテマツラルベキ期イタリテ、大織冠ハ聖徳太子ニツ恠キテ生レ給テ（『愚管抄』p. 140）

㉑は、「いかなる人」が「入る」に係っており、現代語的に見れば形式的には動作主となるが、文脈としては「どのような人でいらっしゃるか」の意であり、動作主としての解釈はできない。

- ㉒ さん候ふ往来の僧にて候ふが、里にて宿を借り候へども、われらがやうなる者には宿を貸さぬよしを申し候ふほどに、このみ堂に泊りて候 シテげにげに里にお宿を参らせ候はんずる者もあるまじく候 ワキ これはいかなる人にておん入り候ふぞ（謡曲集上「鶺鴒」p. 177）

㉓の「ニテ」は動作主に下接している例で、「神風が吹き返せば」という解釈が可能であると思われる。ただし、前文脈で「この嵐山の花は皆神木にて候間」や「折々は、木守勝手の神ともに、この花に影向なる」（折々に、木守の神、勝手の神が一緒に、この花のところに姿をお見せになる）とあるので、「ニテ」を道具、材料として「（木守の神、勝手の神が）神風で吹き返せば」という解釈もなりたつ。

- ㉔ 春の風は空に満ちて、春の風は空に満ちて、庭前の樹を剪るとも、神風にて吹き返さば、妄想の雲も晴れぬべし（謡曲集下「嵐山」p. 232）

以下の㉓～㉔は、「ニテ」の上接語がいずれも動作性述語に係っており、動作主に下接する「ニテ」と認めることができるものである。しかしこれら

の「ニテ」も⑳同様、様態としての解釈が可能である点は注意したい。

- ㉓ 「此人悪キ事ハサル事ナレ共、又直人トハ不覺。鎌倉ニテハ鶴岡ノ八幡宮ニテ、兒ヲ切殺シテ神殿ニ血ヲ淋キ、八幡ニテハ、駒方ノ神人ヲ殺害シテ若干ノ神訴ヲ負フ。尋常ノ人ニテ是程ノ悪行ヲシタランニ、暫クモ安穩ナル事ヤ候ベキ」（『太平記』 3 p. 344）
- ㉔ それは賢きいにしへの、世もたけ心冴えて、道ある友人の数々、積善の餘慶家々に、普く広き道とかや、今は濁世の人間、ことに拙きわれらにて、心も移ろふや（謡曲集下「松虫」 p. 340）
- ㉕ まのあたり善導の御をしへさふらふぞかし。釋迦如來は「名無眼人、名無耳人」ととかせたまひてさふらふぞかし。かやうなるひとにて、念佛をもとどめ、念佛者をもにくみなんどすることにててもさふらふらん（親鸞集、消息 p. 161）。

以上、鎌倉室町期の「ニテ」において、動作主に下接していると解釈可能な例は㉑、㉒～㉕の5例のみであった。これらの例は、現代日本語から見ると動作主に下接していると見ることができる例であるが、当時の日本語「ニテ」において、動作主に下接する用法が果たしてあったのであろうか。用例約9000例中5例（0.06%）という数値をどう見るかによるが、当時の「ニテ」にはやはり動作主に下接するという用法はなかったと思われる。

2.3 「われにてさへ」の解釈

⑨の「ニテサエ」が動作主に下接する例である可能性は捨てきれないものの、2.2で見たような「ニテ」の実態からすると、「われ」を動作主として解釈するのは無理があると思われる。この場合の「われにて」は「自分で」の意味であると考えられるべきであろう。実際に古典語資料においては、㉖～㉘のように「われにて」が「自分で」の意味で用いられている例が見られる。

- ㉖ われにて思ひしに、「あな、情な。うらめしうも」と（『源氏物語』 2 p. 404）
- ㉗ 「さりとして、おびえおきて、ほどなくたち返なんを、我にてことほりと思ひゆるすべき事ならずかし」（『夜の寝覚』 p. 300）

- ⑳ ワレニテ人ヲシルニ物ノ道理ヲワキマヘシラン事ハカヤウニテヤ (『愚管抄』 p. 320)

2.4 「デ」の実態

この期には格助詞「デ」が存在するにもかかわらず、「デサエ」形式は見られない。動作主に下接する「デ」が存在しないからであると思われる。ここでは「デ」の実態について見てみたい⁵⁾。「デ」は新しい助詞であり、特に鎌倉期の資料においては多くは見られない。

管見によれば「デ」が見られるのは、調査した資料中、鎌倉期では、『十訓抄』1例、『平治物語』1例、『梁塵秘抄』2例、『平家物語』222例、南北朝室町期では、『曾我物語』1例、『御伽草子』2例、『謡曲集』17例、『湯山聯句抄』151例、『中興禅林風月集抄』129例、『伊曾保物語』32例、『天草版平家物語』379例である。時代がくだると「デ」が多く見られ、次第に拡がっていき様相がうかがわれる。

以上の「デ」の用例中、動作主に下接していると解釈可能な例は以下の通りである。

2.4.1 「(場所名詞) + デ」

㉑の「是」は、場所名詞でもあるが人称でも用いられるので、動作主とも解釈が可能である。㉓は、尊敬表現が用いられていることにより、「御前」に動作主性が見えてくる。

しかしこれらはいずれも、2.2.1で見た「ニテ」と同じ状況であり、場所を示す「デ」と考えられる。したがってこれらの「デ」は場所を示す「ニテ」を引き継いだものと思われる。

- ㉑ 「内府は何とおもひて、これらをばよびとるやらん。是でいひつる様に、入道が許へ射手などやむかへんずらん」との給へば (『平家物語』上 p. 176)

- ㉓ 宋朝ノ君ノ前テ、応制ノ詩ト云テ、御前テ詩ヲ作ラセラレタ時、本韻ニ、「紅会合緑徘徊」ト云ヲシタホトニ (『湯山連句抄』 p. 70)

2.4.2 「(場所名詞以外) + デ」

③①は、「御房」という主語が表示されているので、「勅勤の身」は動作主としては認められないが、③②のような、主語が他に表示されていない例となると、「拙い身」を動作主として解釈可能であろう。③②の「デ」は動作主に下接していると認めることができる。

③① 「さもさうず、御房も勅勤の身で人を申ゆるさうどの給ふあてがいやうこそ、おほきにまことしからね」（『平家物語』上 p. 364）

③② 「あれほど卑しう拙い身で、何としてこの返答には及ぼうぞ」（『エソポのハブラス』 p. 19）

③③の「デ」は様態であり、「かためられ」は受身と解釈すべきであろうが、これが尊敬と認識されるようになれば「大勢」に動作性が見えてくる。

③③ 「東の陣は小松殿大勢でかためられて候」（『平家物語』上 p. 135）

2. 4. 3 動作主の有無

「デ」の中で、動作主に下接していると見なせる例は③②の1例のみであり、やはり「デ」においても「ニテ」同様、動作主に下接する用法はまだ存在しないと考えられる。「デ」は音韻変化によって「ニテ」から発生したと見られているが、その「ニテ」の用法をそのままに引き継いでいると思われる。

3. まとめ

以上、見てきたように、鎌倉室町期においては「ニテ」や「デ」には未だ動作主を示す用法はないと考えてよさそうである⁶⁾。「ニテ」の音韻変化によって新たに「デ」が誕生したが、当初の「デ」の機能は「ニテ」をそのまま引き継いだものであったと思われる。

この流れを受けて「ニテサエ」という表現形式も、「デサエ」という表現形式に移行したものと思われる。そして江戸期以前においては「ニテサエ」も「デサエ」もそれぞれ「ニテ+サエ」「デ+サエ」という接続であったと考えられる。

一方で、間淵（2000）が示すように、江戸期に入ると「デ」が動作主に下

- 2) 用例は国文学研究資料館の大系本文（日本古典文学）データベース（<http://base3.nijl.ac.jp/>）、『新編日本古典文学全集』（小学館）、『鎌倉時代物語集成』（笠間書院）を用いた。引用に際しては作品名と掲載ページ数を付記した。
- 3) この例は『新編日本古典文学全集』による。因みに大系本文の当該箇所は以下の通りである。

すこしもにたまはず。まさしき兄弟さへ、にたるはすくなし。まして、従兄弟ににたる物はなし（『曾我物語』 p. 166）

- 4) ここでは用例が十分に見られるため大系本文のみ調査した。時代を中世に指定し、ジャンルから和歌、歌謡、漢詩、漢文、連歌、俳諧、俳論、狂歌を除き、歴史、物語、評論、国学、随筆、随想、説教、神話、伝説、説話、小説、劇文学、日記、紀行に関して用例の検索をした。
- 5) 格助詞「デ」を調査した資料は以下の通りである。

【鎌倉期】

『宇治拾遺物語』『古今著聞集』『沙石集』『保元物語』『増鏡』『方丈記』『平家物語』（以上、日本古典文学大系）、『東関紀行 本文及び総索引』『十六夜日記 校本及び総索引』『閑居友 本文及び総索引』『十訓抄 本文と索引』『水鏡 本文及び総索引』『とはずがたり総索引（本文編）』（以上、笠間書院）『半井本平治物語本文および語彙索引』（武蔵野書院）、『宮内廳書陵部蔵本 寶物集総索引』（汲古書院）、『徒然草総索引』（至文堂）

【南北朝室町期の資料】

『曾我物語』『御伽草子』（以上、日本古典文学大系）、『湯山聯句抄本文と総索引』『中興禪林風月集抄』、『エソポのハプラス 本文と総索引』（以上、清文堂）、『天草版平家物語対照本文及び総索引』（明示書院）

- 6) 間淵（2000）では、「動作主格用法が、「にて」から「で」への変遷がほぼ済んだ後、相当の期間をあけて登場する」という指摘がすでにあるが、実例をもとにした指摘ではない。本稿ではこの裏付けができたものとする。

【参考文献】

間淵洋子（2000）「格助詞「で」の意味拡張に関する一考察」『国語学』51-1
山田昌裕（2012）「「デサエ」の融合化とその背景」『表現研究』96